

希望と挫折が生み出す未来

- 『中央公論』2005年9月号 28-29 ページ

「かつて経済大国と呼ばれた日本もすでに見る影はない。国内総生産もピーク時の1990年代に比べて大きく減退した。少子化の進行に数々の対策が打たれたものの功を奏さず、子どもの減少にはもう歯止めはきかない。高齢社会による重税や社会保障の過重な負担によって、現役世代の多くが就労意欲を失い、さらに所得はごく一部の人々へ集中する傾向が益々強まっていく...」

21世紀の日本社会に待ち受けるのは、そんな鬱屈した社会だといわれれば、将来に希望を持ってといわれても無理な話だ。実際、希望が語られるとき、付随するのはきまって喪失という言葉だったりする。そんな希望の無さを象徴的に体言しているのが、無業の若者たちだ。

だが、そもそも希望というのは何なのだろう。ゲーテ、カミュ、魯迅など、これまで多くの著述家が希望について語ってきた。現代の小説家もしばしば希望という言葉を用いる。しかし希望とは何かについて誰もが納得する唯一の定義をするのは難しい。希望の意味は人それぞれ違う。

そんな個人の価値観によって意味も異なる希望だが、だからといって共通の語り口が、まったくないわけではない。その意味をいくつかのタイプに分けること、すなわち類型化は可能だ。

たとえば、平等という概念も、そこに単一の定義を与えることは難しい。「平等とは何か」は個々人で異なるし、同じ人間でも置かれた状況によっても異なる。だがそんな平等でも、機会の平等と結果の平等、ときには過程（プロセス）の平等というように、平等の概念を整理し、類型化することは出来る。それによって異なる平等観を持つ個人のあいだでも平等についての会話は成立する。その結果として、平等を意識した社会政策の論議も可能になる。

同様に、希望についても類型化は可能だ。ひとつは実現可能性という切り口。個々が持つ希望のなかには、手を伸ばせば実現可能な希望と、実現が困難な希望がある。ただし実現可能性といっても、それ自体、程度もしくは確率の問題であり、ほとんどはその間のどこかにある。

今年前半に話題となった社会学者山田昌弘氏の著作『希望格差社会』（筑摩書房）で語られたのも、努力すれば報われるという希望を持てるのが、一部の特定の人々に集中しつつあるという事実だ。残りの大部分の人々は、希望そのものを持ってないか、そうでなければ実現不能な夢物語の世界に浸るしかないという。

ただ希望には、実現可能性とは別の観点の切り口もある。それは、希望することが何らかの行動を生み出すものであるか、それとも一切行動を伴わないかという区分だ。実際、それが実現困難だったとしても、希望を持つことが何がしかの変化を

個人の考えや行動、そして個人と社会の関係に影響を与える場合がある。

『希望格差社会』では、そのうち実現可能性な希望を持たない若者たちが、苦労やリスクを空しいと考え、行動を伴わない夢物語の世界に逃げ込んでいる姿が強調されている。

だがその一方で、こんな看護学の実証研究もある。ガンの再発を告知された患者とその家族に対して、生きる希望を感じさせる様々な措置を講じることで、患者に実際生きる希望が生まれ、さらには余生の生活の質（QOL）も向上するという。

希望の効果について、東京大学社会科学研究所が実施した20代から40代へのウェブ調査もある。それによると、中学3年生の頃に希望した職業に実際就いた経験があるのは15パーセントにすぎない。15歳の頃の職業希望は、ほとんどの場合、実現困難だ。しかし、これまでやりがいのある仕事に就いたことがある確率は、実現は困難だったとしても具体的な職業希望を持っていた人のほうが、持っていなかった人に比べて明らかに高くなっている。

希望があったからこそ、仮にそれ自体が実現出来なかったとしても、挫折を経た上で、進むべき途を学習し、個人と社会との関係に変化を生んだりする。その結果、希望がなかった場合より高い充足を獲得出来たりすることがある。

希望と挫折、その後の修正のプロセスの意味を、具体的に明らかにしていきたい。そうすれば希望なき時代の人々に何らかの生きるヒントを提示出来るかもしれない。そんな思いで私たちの研究所では「希望学」という学問を始めている（詳細は <http://project.iss.u-tokyo.ac.jp/hope/>）。